

本稿は、中学1年生を対象とした筆者オリジナルの題材による2つの実践から、生徒の主題生成における実態把握を目的とするものである。

平成29年3月に公示された中学校学習指導要領では、デザインや工芸などに関する活動において、これまで記載されてこなかった「主題を生み出すこと」が新たに加わる等、主題のもつ意義はより増してきている。しかし主題は生徒の内部において生成されるものであるため、それが制作段階のいつ頃、どのように生み出されているのかを的確に捉えることは難しい。だが、そのプロセスを把握することができれば、指導者がより適切な働きかけを生徒に行うことも可能となるだろう。

本稿では、デザイン分野と彫刻分野の題材を通して、主題生成の考察を試みた。デザイン分野の題材では、四季の中から1つを生徒本人が選択し、その季節感をポスターとして表現するという実践をした。また彫刻分野では、生徒が調べてきた動物・昆虫の特徴を単純化・強調をし、それを紙粘土で成型して表すという題材で授業を行った。

以上のデザイン及び彫刻という異なる分野における2つの実践から、主題意識がいつの段階で確定するのかをアンケート調査から検証した。更に彫刻題材においては、発想・構想段階で使用したワークシートの分析を通して、主題意識が生成する過程の実態について考察した。

実践の結果、以下のことが明らかとなった。まず主題の確定する時期についてだが、アイデアスケッチの途中段階での主題の言語化も可として授業を行った結果、デザインと彫刻のいずれの題材においても、アイデアスケッチの途中段階で主題を確定化しようとする生徒が多数を占めることがわかった。主題を明確にしてからアイデアスケッチに取りかかる生徒の割合は全体の約3割に過ぎず、アイデアスケッチを行いながら主題を確定化する生徒が約5割を占めた。また、約2割の生徒は、アイデアスケッチを描き終えた後に時間切れとなって主題を後付けしているという実態がわかった。

次に主題の生成過程の実態について、彫刻題材における実践の考察から、次に挙げる3点を明らかにした。1. アイデアスケッチを通して実際にアイデアを具現化することで思考が整理され、主題生成や確定化に向けて効果的に作用する。2. 主題生成や確定化においてつまり生徒には判断力の弱さが見られる。3. 主題を決められないことにより、造形的な工夫を施す時間が確保できず、表現としての深まりに乏しい作品となりやすい傾向にある、という実態である。

本研究で明らかとなった実態を受けて、今後は主題生成において判断力の弱い生徒に対し、どのようにアプローチする必要があるかという視点をもって、授業の改善を図っていく必要がある。